心敬合点の基佐の和歌懐紙をめぐって

稲田利徳

一

室町時代の歌人・連歌作者であった基佐（桜井・永仙）といえば、次の狂歌が著名である。

　遥見二筑波一銭便入、不レ論二上手与下手一
足なくて登りかねたる筑波山和歌の道には達者なれども
（卯花園漫録[1]）

「筑波」とは連歌の別称、「足」とは手足の「足」と「銭（あし）」を掛けている。意味するところは、自分は和歌の道では上手であったけれども、金銭がなかったため、連歌の道では評価されなかったと嘆息していることになる。

　この狂歌は、江戸時代の『曽呂利狂歌咄』（浅井了意著）・『翁草』（神沢杜口著）・『仮名世説』（大田南畝著）・『にぎはひ草』（佐野紹益著）などの随筆類にも収録され、大いに喧伝されている。

　この狂歌創作の背景としては、宗祇が明応四年（一四九五）に准勅撰の連歌撰集である『新撰菟玖波集』を編纂した際、そこに基佐の連歌が一句も入集しなかったこと、それを恨んだ基佐が、入集しなかったのは、撰者宗祇に賄賂を贈らなかったからだと、銭づくの撰集を痛烈に皮肉ったことにある。

　基佐には『桜井基佐集』という三百首足らずを収めた私家集がある。そのうち八十首程は他人の和歌を含み、題材・用語の卑俗なもの、語戯的なもの、自然を有心的に把えた哄笑を狙ったものなど、俳諧的な和歌の多いことを論及したことがある[2]。この私家集は、他人の詠歌があったり、長い詞書を有する歌が多く、そこに登場する人物も、基佐と交誼のあった歌人も確認できず、奇妙な私家集だが、研究者のなかには、虚構の世界を取り込んだ創作歌集ではないかと臆測するむきもある[3]。

　その一方、正徳元年（一七一一）十月、豊臣秀三撰に成り、中世末から近世の地下歌人の和歌を集成した『和歌視今集』[4]に、基佐の和歌が二六首見出されるが、『桜井基佐集』とは二首重なるだけで、他の歌は見えず、詞書にも基佐と

交誼のあった人物が登場するなど、別本の『桜井基佐集』が、かつて存在していた可能性のあることを論及したことがある。[5]

先掲の著名な狂歌は、『桜井基佐集』『別本桜井基佐集』や他の基佐の和歌作品などにも見出せない。恐らく基佐の心境を忖度して後人が創作したものであろう。

その狂歌創作の背景は、先にも少し言及したように、宗祇の撰進した『新撰菟玖波集』に、基佐の連歌が一句も入集しなかったことによるが、ここでその不自然さを詳しく説明しておきたい。

基佐の連歌作品は相当数現存するが、斎藤義光氏が作成された「桜井基佐連歌作品年譜」[6]を参照すると、基佐は文明頃から延徳・明応年間にかけて、宗祇の開催した連歌百韻に幾度か出座していることが確認できる。そこでの基佐の出句数は、宗祇の弟子筋の宗長・兼載・肖柏らと拮抗しており、その実力の程が窺える。しかるに『新撰菟玖波集』に、兼載は五三句、宗長は三九句、肖柏は三三句入集するのに、基佐の連歌は一句も入集していない。先に確認した宗祇一座の状況からみると、基佐は少なくとも三〇句前後の入選句があってよい。この不審な事実を背景にして、先の「足なくて」の狂歌が詠まれた必然性があったことになる。

なぜこのよう不可解な結果が生じたのかに関しては、従来、基佐と撰者宗祇との不和説が有力だったが、近年島津忠夫氏は、様々な観点から、基佐と宗祇との間の確執にあったとみるよりは、『新撰菟玖波集』の撰集の助手の役割を担っていた兼載との確執とみる方が真に近いのではないかとの新見解を提示している。[7]

ところで、例の狂歌が最初に文献に見出されるのは、文禄（一五九二〜一五九六）前後の成立とされる狂歌説話集の『遠近草（おちこち）』[8]で、

　桜井もとすけといふ人、まづしくて集にいらざる事
　をなげきて
　あしなふて（ママ）のぼりかねたるつくばやま和歌のみちには達
　しやなれども

とある。

しかし、この狂歌は、『人鏡論』[9]にある、

　此過し年の暮つかたに近江守といひし人、多年四品（しほん）の望みありけれ共、年若き人にていさめる大将なれば、将軍家ゆるしなくて有侍るに、近江守一首の和歌をつゞりてあげゝれば、上にも哀におぼしめして四品になりぬ、其歌に、
　　あしなくて登りかねたる位山弓矢の道は達者なれども

と類似歌が存するのは興味深い。

この『人鏡論』の近江守の狂歌は、彼が「四品（しほん）」、即ち四位の身分なることを切望していたが、若くて血気にはや

る性格だったので、将軍が許可しなかったところ、自分は武芸の道には達者だが、金銭がないために位があがらないと嘆息した内容である。その和歌を受けとった将軍は哀れを催して、近江守を「四品」の位にしたという、歌徳説話の一面も有する話だが、和歌の発想や表現は、基佐の狂歌と酷似し、両歌の影響関係が改めて注意される。もっとも、近江守の狂歌を収める『人鏡論』という書物は、巻末に「于時長享元年冬十一月如意珠日、武林源義政」とあり、序文は「文亀三年孟春初五日、正二位左大臣藤原公藤」とあり、長享元年（一四八七）と文亀三年（一五〇四）と、奥書と序文の年次に不自然さがあり、その成立には問題が存するという。[10]ただ後人の仮託書かもしれないが、大体、中世後期の制作とみなしてよいとの見解もある。[11]

この基佐と近江守の類似の狂歌の影響関係に関して島津忠夫氏は、恐らく、近江守の「弓矢の道は達者なれども」の方が先行し、それをもじったのが、基佐作に擬された「和歌の道には達者なれども」であったと推測している。そして、連歌師の周辺に金銭にまつわる咄（はなし）が多くあり、その一端は『醒睡笑』などに所収されているが、それらの咄が形成されてくる室町末期頃に、先の基佐の咄も作られ、その方が著名になり、もとの近江守の咄は忘れられていったのではないかとの見解を提示している。[12]

二

先に論及したように、中世末期から江戸時代にかけ、基佐という人物は、例の「足なくて」の狂歌に象徴されるように、虚像が作り上げられていたことは念頭に置くべきであるが、本論考の中心である、心敬の合点のある基佐の和歌懐紙を紹介、検討する前に、基佐の伝記に簡単に触れておきたい。

基佐の歌人としての足跡が最初に知られるのは、尊経閣文庫蔵『武家歌合』[13]である。

この歌合は康正三年（一四五七）九月七日に開催されたもので、正徹の私家集『草根集』の同年月日の「ある所歌合に」の三首とも一致して信頼できる貴重な新資料である。そこに出座した歌人十八名には、判者を勤めた正徹の愛弟子である正広・正般などの顔が見えるなど、その多くは正徹の草庵に出入りしていた人物であったと思われる。その歌人達のなかで、この歌合の一番左の和歌を詠出している心敬は、正徹らのような野僧ではなく、聖護院々室十住心院の僧位僧官を有し、人々に尊敬されていたので、正徹門下でも客分的な扱いを受けていたのであろう。しかし心敬が正徹（清岩和尚）の卓越した和歌の技量に傾倒していた気持は、彼の連歌論書などの著作類に「清岩和尚に、卅年は日夜の事に侍しかども、一の事をも耳にとどめず、いさ

さかの悟を得侍らざりし、今は千たび悔ひ、足摺をして侍るばかりなり」（ひとりごと）、「清岩和尚常に語り給ひし。『雨風につけ、ひめもすに夜もすがら、和歌の友をのみ思ひ出侍る』とありし、情け深し」（ささめごと）、「清岩和尚、尤冷泉家の随一末葉なれども、我は何れもうるさく侍り、下りはてたる家をば尊まず、ただ俊成・定家の胸のうちを学び侍ると常に語り給へる、賢く有難くこそ覚侍れ」（所々返答・第二状）などと随所に吐露されている。心敬にとって正徹は、定家にも比肩すべき存在で、衰退していた和歌の道を中興した歌人と高く評価していた。従って正徹の死は、「まことに十方常暗冥の時」（ひとりごと）であるとともに、「今は清き岩ほよりうち出でし光も消え侍れば、この道又かき暮れぬるこそ悲しけれ」（ささめごと）と慨嘆せざるをえなかった。心敬のこの正徹敬慕の念は終生変らず、正徹の十三回忌に際しても追善百首を詠出してもいる。[14]ただし、心敬は正徹から、いささか冷たい扱いを受けていたらしく、正徹の遺影に「ことの葉はつゐに色なきわが身哉むかしはまま子いまはみなし子」と詠じ、「かばかりの恐恨など侍しかども、三十年の庭訓、誠に高恩不思議の値隅、多生広劫をへても報謝しがたく思ひ侍る事のみなり」（所々返答・第一状）と複雑な心情を吐露してもいる。このあたりの師弟感情に関しては、かつて論及したことがある。[15]

さてこの歌合で基佐は三首の和歌を詠出しているが、三首とも勝の判定を受けて好成績であった。基佐の出自は未詳だが、どのような契機で、この正徹主催の歌合に参加できたのであろう。正徹と基佐との交誼は、現存資料ではこれ以外に確認できない。後述するように心敬とは親しく、彼を尊崇していた事実からすると、心敬に勧誘されて参加したのかもしれない。ただ正徹の直接の弟子でなかったとしても、当代の歌壇において、地下だけでなく堂上においても、圧倒的な景仰を受けていた最晩年の正徹（時に七十七歳）の歌合に参加できたことは、基佐にとって生涯忘れがたい体験だったであろう。

基佐の和歌・連歌創作にあって、最も重要な人物は心敬であろう。心敬は応永十三年（一四〇六）紀州名草郡田井荘に生まれ、三歳で上洛、二十四、五歳頃から三十余正徹に師事、音羽山麓の十住心院に入り、三十七歳頃に権律師、ついで権大僧都に至っている。応仁元年（一四六七）四月、応仁の乱を避けて関東に流浪し、相模大山山麓の石蔵で、文明七年（一四七五）四月十六日、非運を嘆きつつ、七十歳で死没している。基佐が先の『武家歌合』に同座したとき、心敬は五十一歳だった。死後二十年後に撰進された『新撰菟玖波集』に、心敬の句は集中第一位の一二四句が入集しているように、生前から連歌作者としても尊重されており、当然基佐も私淑していただろう。

別本『桜井基佐集』には、

　僧都心敬のもとにて歌よみ侍りけるに、寄浦恋

立かへる袖のなみだのよるよるやかけて難面(つれな)き松がうら嶋

と、心敬のもとでの歌会に参加した記事や、

　したしかりし友のはかなく成しにつけて、基佐（の）
　もとへ読て遣し侍る　　　　　大僧都心敬

ながれ行(ゆく)水のあはれをまづとふやけふとまる身のならひ也(なり)けり

　返事　　　　　　　　　　中務丞桜井基佐

ながれゆく水のあはれをとふからに袖に涙のたきまさる也

と、親しい人の逝去を哀悼する贈答歌も見出され、心敬と基佐との交誼が窺える。加えて、金沢市立図書館蔵『ささめごと』の奥書に、「以二十住心院心敬法印直筆一写レ之、桜井弥四郎基佐令レ借二用之一訖、文明八年九月日、妙覚寺羽林[16]　公覚」とあるが、これによると基佐が心敬自筆の『ささめごと』を所持していたことになり、基佐が心敬の連歌論を熟読していた可能性がある。

　応仁元年（一四六七）に勃発した応仁の乱は、七、八年も続き、京洛を焼野が原とし、多くの文人達の運命を翻弄した。この間、基佐がどんな環境にあったかは不明だが、崇敬した心敬が遠い東国に去ったことは、彼に寂寥の思いを催させたであろうことは容易に推察できる。

　その後基佐は、明応四年（一四九五）撰進の『新撰菟玖波集』に一句も入集しないという惨事を体験することになるが、不思議なことに、その後も宗祇の主催する明応七年頃から文亀年間頃の百韻連歌に幾度も出座している。彼の現在知られる最後の事蹟は、永正六年（一五〇九）十月二十日の年月日を有する『永仙独吟百韻』（小鳥居本）とされる。初見の『武家歌合』（一四五七）に三十歳であったと仮定すれば、永正六年は八十二歳となり、この後間もなく没したのではないかとみるむきもある。[17]

　なお別本『桜井基佐集』には、

　都を出し後の春、おもひの外にふたたび帰りすみ侍
　りければ、あひしれる人のもとへ読てつかはしける

世の中をいとへばとはぬみやこをも花さくころは心よはりて

とか、

　述懐の歌の中に

捨はててせめてはやすき我身かなうき事は猶うきよながらも

といった意味深長な和歌も見出される。これによると基佐は、ある時、世の中を厭って都を脱出したが、その時の心境は、もはや都には二度と帰らないと決意したものであっ

たという。この詠歌が晩年のものとすれば、基佐の人間像にも陰翳が加わる。

なお宮内庁書陵部蔵高野本（原題「連歌書」）や伊地知鉄男本などに、写本として伝存する『基佐心敬問答』という書がある。巻頭に桜井弥次郎（基佐）が、北山の十住心院蓮戒坊（心敬）を尋ねて、連歌に関する質問をするという構成からなり、本文の後に「天正十四歳丙戌初夏日」とある。これは恐らく、先述したような心敬と基佐の師弟関係に着目した後人が創作した偽書とみなされる。

さて、早稲田大学図書館蔵伊地知文庫には次のような「桜井基佐和歌懐紙」（文庫20－455）が収蔵されているが、これまで紹介、検討されていない資料であり、ここで検証を加えてみたい。

まずその書誌的な事項の説明を加えておく。

この懐紙は、軸物に仕立てられ、縦四五・五糎、横六糎の桐箱に収められている。掛軸の幅は、縦一〇三・五糎、横二九・七糎。それに縦二六・二糎、横三七・六糎の懐紙を貼付している。懐紙の上下に各六糎の金蘭唐草文様の布を配している。懐紙の内容を行間や文字の配置などを原文に忠実に翻刻すると次のようになる。

> 権大僧都心敬点之中和歌
> 二首鶴千代丸依所望に
> 書散したてまつる
> 梅　　　　基佐
> 人はいさ心もしらすとはかりに
> にほひわすれぬやとの梅か香
> 忍恋
> 比も経ぬ忍ふの乱れ限あらは
> こゝろのおくの色や見えまし

詞書と和歌の間に一行文の空白がある。さらに懐紙中央に縦線の痕跡がみえるところから判断すると、詞書と梅の和歌までの懐紙（二〇糎）と忍恋の和歌の懐紙（一七・五糎）の二枚を継ぎ合せたものかもしれない。

この懐紙の意味するところは、かつて基佐が自身の詠歌を心敬に送付して評価を求めたことがあり、そのなかの優れた歌に、心敬が合点を付して返却してきたことがあった。その事を仄聞した鶴千代丸が、合点歌を知りたいと所望してきたので、そのうちの二首を書き記して送ったということだろう。ただし、この懐紙自体は、鶴千代丸に送付したものではなく、基佐の手控えか、他人に知らせるものとし

て残したものだろう。
「鶴千代丸」は童名だろうが、「書散したてまつる」と敬語を使用しているので、身分のある少年だろう。「鶴千代丸」とは字柄からみても、めでたい命名であり、『国書人名辞典』や『和学者総覧』を検閲すると、「鶴千代」「鶴千代丸」の童名を有する人物は十余名見出される。その内、室町時代の文人としては、太田道灌（永享四年生―文明十八年没）や蒲生氏郷（弘治二年生―文禄四年没）がいるが、ともに基佐の年齢とは、うまく交差せず、今のところ「鶴千代丸」なる人物は特定できていない。

　内容的には、心敬が「権大僧都」になっていたことは、心敬自筆の『寛正四年百首』の巻頭署名でも確認できるし、先に言及したように、基佐が心敬を敬慕して交誼のあったことから判断すると、生前、心敬に自詠歌を送付し、合点を得ていたことは十分に考えられ、これといった不審な点はない。また懐紙の料紙や墨質の古さからみて、室町時代のものとみなしてよい。あとはこの懐紙が基佐の自筆か、それとも第三者による転写か捏造かという検討が残された課題である。

　基佐自筆と称される和歌短冊・和歌懐紙・句入り消息懐紙は現存するものでも十数点見出されている。[18]これらの紹介は、拙稿や加藤定彦氏によってなされている。[19]ただ残念なことに、その多くは古書店などの売立目録の写真版によるもので、所蔵者も不明で、その多くを現物に当って調査できない。

　そのうち、かつて井上書店『古典籍特輯目録』（昭和五十七年）に売出されたものが、国文学研究資料館蔵「基佐自筆消息」（ヨ1－73）として収蔵された。現物に当ってみると、料紙・墨質からみて室町期の書写とみてよく、自筆の可能性がある。また、かつて『創立五十周年記念善本図録』（昭和三十五年・東京古典会）にも掲載され、その後今治市河野美術館の収蔵となっている「基佐句入消息」も現物に当って調査したが、これも室町期の書写で「基佐」の署名の下には花押もあり、自筆とみなされる。この現物に直接当って調査した二点の「基佐」の署名の独特の筆使いは、今取りあげている心敬合点の「基佐」の署名と酷似し、また他の文字の筆使いも近似する。

　以上の検討を通して、伊地知文庫の「桜井基佐和歌懐紙」は基佐の自筆懐紙とみなしてよいと思量する。

　けれども、この自筆懐紙の内容を額面通りに受けとることができないことが明確になる。それは実に驚くべきことだが、懐紙の基佐自身の和歌とする「梅」と「忍恋」の二首は、彼のものではなく、『草根集』に収録されている正徹の和歌であった。即ち『草根集』巻一の、奥書に「宝徳三年四月二日、長谷寺七ヶ日参籠」とある「侍長谷寺仏前詠五十首倭歌」の春十首と恋十首のなかの各一首と一致す

るのである。

懐紙の和歌と『草根集』の和歌の本文を比較してみると、若干の異文が認められる。「梅」の歌の第五句「やとの梅か香」は『草根集』の類題本系では「梅か香」と一致するが、日次本系では「梅か枝」と異文がある。また「忍恋」の第五句「色や見えまし」は、『草根集』の諸本は、すべて「露やみえまし」と異文がある。内容的には「色」の方が理解しやすいが、ここは「露」の方が修辞的にみて優れている。この一首で「露」は衣の縁語として表現され、それに「少し」の意を掛けているのであろう。いかにも正徹らしい巧みな修辞が駆使されている。基佐が「色やみえまし」と書き写したのは、その修辞が汲み取れず、敢えて理解しやすい「色」に変えたのかもしれない。

因みに『草根集』は全十五巻、一万一千余首を収録する厖大な私家集であるが、基佐はその写本を所持していたか、披見できる立場にあったと思われる。そのなかから、先の二首の和歌を選択したのは、全巻を熟読したのではなく、手っ取り早く、巻一に着目したのであろう。しかも、先の「人はいさ」の「梅」の歌は、「人はいさこころもしらず故郷は花ぞむかしの香に匂ひける」という『古今集』（巻上・貫之）の著名な和歌を、また「比も経ぬ」の「忍恋」の歌も、『伊勢物語』（初段）の「春日野の若紫のすりごろもしのぶの乱れかぎり知られず」の人口に膾炙された和歌を、それぞれ本歌取りしていることに興味を喚起して選歌した可能性がある。ただし『草根集』から選歌するに際しては、正徹が『正徹物語』などで自讃し、当時の歌人仲間に知られていた和歌は避けなければならない。その点『草根集』は一万一千余首を収める私家集であり、それをすべて熟知している人はいないから、そこから二首を自身の歌として抜書しても、馬脚をあらわにすることはないとの計算があっての行為であろう。

翻って、この心敬合点の基佐の和歌懐紙が、彼自身の手になる捏造だと確認されると、かつて心敬から合点をもらった和歌があったことも虚構であり、それを披見することを所望した「鶴千代丸」も架空の人物だった可能性が濃厚となる。

果して基佐は、どのような目的のために、このような和歌懐紙を捏造したのであろうか。手元に置いて、その虚構を楽しんで自己満足していたとは考え難い。やはりこれは、和歌に相当な関心と理解のある文人や貴人に披見して欲しかったための仕業であったのではなかろうか。

以上の検討を経て、当面対象としてきた基佐の和歌懐紙は、少なくとも三つの権威付けがなされる。一つは、基佐の和歌が当代随一の連歌作者・歌人であった心敬から合点を得ていた事実、二つめは、その二首の合点歌は、巧みな修辞技法と本歌取りを駆使した秀歌であったこと（実は当

代随一の歌人正徹の和歌)、三つめは、その合点歌の披見を、高貴な身分の少年から切望されていたことである。

その後、基佐が捏造したこの自筆懐紙が、彼の期待したような効用を果したかどうかは知る由もない。けれども五百年以上の長い時を経て、所有者を転々として現存していることや、あの狂歌に象徴されるような悲運に翻弄された基佐の人生に思いを致すとき、様々な感慨を催してくるのである。

三

先には、心敬合点の基佐の和歌懐紙が、彼自身によって捏造されたものであることを検証してきた。

このような捏造・偽書・贋物の作成は、別に珍しいことではなく、いつの時代でも、どこの国でも、金銭欲・名誉欲・権力欲などの、人間の欲望と絡めて、様々な方面で行われてきたことである。

そこで最後に、鎌倉時代から江戸時代までを通覧し、和歌関連の偽書に限定して、その具体例の一端を記述し、基佐の和歌懐紙の位置付けを試みておきたい。

「偽書」には、自らを新たな権威に擬するために、伝統的なものへの回帰・憧憬などの復古精神が強く現れているとされる。空海・業平・定家といった権威に託して「秘説」を創作した偽書などは、その典型である。

和歌の分野では、定家・為家の後、二条家が二条家・京極家・冷泉家に分裂したため、為世流は悦目抄系歌論、為顕流は竹園抄系歌論、為実流は鵜鷺系歌論、家隆末流は和歌口伝系歌論などの一連の偽書が夥しく作成されてきたこと、その意図に関しては、従前にも幾つもの研究成果がある。[20]

また和歌史上、著名な歌人でありながら私家集が現存しないことに着目、あたかもその歌人の私家集であるかのように装ったものが写本として幾本か現存する。例えば『為季集』は奥書に「文安二年三月十二日以左大将殿自筆書写畢」とあるが、収載歌を検討すると、文安二年以後の『文明歌合』の歌などがあり矛盾する。『為兼集』も奥書に「此一冊大納言為兼以真翰令書写、輙校合畢、于時文安元年甲子三月下旬」とあるが、収載歌には文安元年以後の文安四年の歌もあり、これまた奥書も信用できない。

このような私家集は、他にも『光俊集』・『為冬集』・『資賢集』など十種近く現存するが、すでに検証されているのように、[21]『題林愚抄』などの類題集から無作為に和歌を選歌し、作者名も削除して作成されたものである。いわば表題の歌人の私家集であるかのごとく装った一種の偽書とみなされる。従って私撰集とみるのは適切ではなく、和歌資料としての価値も乏しい。因みに現存するこの種の写本にすべて当ってみたが、室町期の古写本はなく、いずれも江

戸中頃のものであった。その点、これらの偽書私家集の成立は、『題林愚抄』の版本が刊行された寛永十四年（一六三七）以降で、江戸時代の産物であると推測される。

　また室町末期から江戸時代になり、兼好の『徒然草』が脚光を浴びるようになると、兼好に関する怪しい伝記や和歌資料が捏造されてくる。例えば兼好の自筆短冊・懐紙と称するものが売立目録に幾首も見出される。ところが、『武州行田花潭大沢家蔵品目録』（昭和三年三月）に掲載の左記の、

> 秋くさのかれ葉のしたのきり〴〵す
> いつまてありて人にきかれむ　兼好

の和歌は『玉葉集』に入集の後九条内大臣の歌で兼好のものではない。同じく『京都遠藤家所蔵品入札目録』（昭和十一年十二月）掲載の、

> きえぬへき露のわか身のおきところ
> いつれの野辺の草葉なるらん　兼好

の和歌も兼好のものではなく、『続古今集』に入集する殷富門院大輔の和歌である。もはやここで逐一例示することはしないが、他の大部分も、勅撰集入集歌などを兼好の和歌として捏造したものであることが検証できる。

　これらは江戸時代の『徒然草』ブームに乗って、後人が捏造した贋物だが、あたかも真筆を装って軸物などに仕立て、古美術商などに売り出すという金銭欲と絡まっての偽作行為かもしれない。

　さらに兼好は、鎌倉時代後期に京都吉田神社の神職である卜部家に生まれ、六位蔵人・左兵衛佐となり、朝廷に仕えたという、広く知られた彼の出身や経歴なども、兼好の没後、吉田兼倶などによって捏造されたものであることも実証されている。[22]これは家系の権威付けを企図した捏造行為であろう。

　秋田大学附属図書館蔵『詠歌一体』は、その奥書によると、嘉元年間頃（一三〇三－一三〇六）に為相が書写した本を、建武三年（一三三六）三月十九日に桑門某が書写したと伝えている。けれども、この為相の奥書は為秀が仮構したもので、自身を「桑門」と隠名にし、あたかも、嘉元頃の為相本を建武三年に桑門某が書写したように偽装したものであることが実証されている。[23]この偽装は書写本を権威付け、もって自身の歌道家の正当性を目論んだものだろう。

　また香川大学附属図書館蔵神原文庫には、「寛正三年壬午六月二日写之（署花押）」の奥書を有する正徹筆の藤原家隆『詠百首和歌』写本一冊がある。この写本は正徹筆を

基本として、寛正三年に某が数行と奥書を、また途中三首は和歌のみは別人が補欠追加した書冊に、さらに正徹の弟子正広が家隆の歌二首と自詠を加えており、おそらく正広の手沢本であったとされる。けれども内容に立ち入ってみると、家隆の『詠百首和歌』とみるには不審な点が多く、本作はいわば正徹とその弟子たちによって、家隆の『次歌百首』を装って捏造された偽書であることが検証されている。[24] 当代随一の歌人として高く評価されていた正徹ともあろう人物が、なぜ、このような作品を捏造したのか、その意図は必ずしも明瞭ではないが、夥しい偽書が作成された時代の精神の一面を示す資料といえよう。

以上、鎌倉時代から江戸時代にかけての、和歌関連の偽書成立の背景の一端を具体的に記述してみた。

このような偽書成立の状況のなかに、先の基佐の捏造した和歌懐紙を位置付けてみると、その行為は金銭欲や家系の権威付けなどではなく、当代において尊崇されていた心敬や正徹の権威を取り込み、あくまで自分自身のためになされたものと思量する。そういう捏造行為の背後に貼り付いている心情に思いを致すとき、そこに悲しい表情をした一人の人間が彷彿としてくるのである。

注

(1)「新燕十種三」に依拠。
(2) 拙稿「桜井基佐の作品における俳諧的表現」(連歌俳諧研究・第四十号・昭和四十六年三月)。
(3) 松本智子「『為忠集』の手法—『頼政集』との類似歌を中心に—」(中世文学・第五十三号・平成二十年六月)。
(4) 吉田幸一編『長嘯子全集』(第四巻)に収録。
(5) 拙稿「別本桜井基佐集について」(古代中世国文学・昭和四十九年二月)。
(6)「晩年の基佐連歌—付資料紹介—」(大妻女子大学文学部紀要・昭和六十二年三月)。
(7)『連歌師宗祇』(平成三年八月)所収、「足なうてのぼりかねたる筑波山—基佐・宗祇確執をめぐって」。
(8) 西日本国語国文学翻刻双書『遠近草・元用集』に依拠。
(9)「続群書類従」(巻九百三十七)所収。
(10) 井上宗雄著『中世歌壇史の研究　室町後期〔改訂新版〕』(昭和六十二年十二月)。
(11) 市古貞次著『中世小説の研究』(昭和三十年十二月)。
(12) 注(7)に同じ。
(13)『中世歌合集と研究(下)』(未刊国文資料)所収。
(14) この百首に関しては、拙稿「『心敬僧都百首』の世界—正徹遠忌和歌をめぐって—」(中世文学研究・第二十五号・平成十一年八月)で論及している。

（15）拙稿「正徹と心敬―師弟感情をめぐって―」（国語と国文学・昭和四十三年・八月）。
（16）木藤才蔵著『連歌論集・俳論集』（日本古典文学大系・昭和三十六年二月）に紹介がある。
（17）木藤才蔵著『連歌史論考下』（昭和四十八年四月）。
（18）注（2）に同じ。
（19）「もう一人の俳諧始祖永仙―書簡から見た桜井基佐」（『俳諧の近世史』平成十年）に所収。
（20）三輪正胤著『歌学秘伝の研究』（平成六年三月）ほか。
（21）三村晃功著『中世私撰集の研究』（昭和六十年五月）。
（22）小川剛生著『兼好法師』（中公新書・平成二十九年十一月）。
（23）佐藤恒雄著『藤原為家研究』（平成二十年九月）所収の「広本詠歌一体の諸本と成立」。
（24）佐藤恒雄著『古代中世詩歌論考』（平成二十五年・三月）所収の「正徹筆藤原家隆『詠百首和歌』」。

（本学名誉教授）